

琉球大学の イリオモテヤマネコ



修学旅行2日目(10月6日)、私たちは那覇市内のホテルから車で30分程の所にある**琉球大学**に来ていた。琉球大学は全国で3番目の広さのキャンパスを誇る総合大学(法文、教育、理、医、工、農、観光産業科学の7学部)で、沖縄の学問の中心地である。多くの校舎が立ち並ぶキャンパスの真ん中には、写真のように、**大きな池と亜熱帯植物のジャングル**が広がっており、その上を高さ20メートルはあろうかという橋がかかっている。学生たちはそこを歩いて学内を移動しているのだ。



この日は、知り合いの杉尾先生(教育学部)の案内で琉球大学の**資料館**を見学することになっていた。資料館は全く観光地化されていないので、その存在はほとんど知られていないが、貴重な展示品が目白押しなのである。亜熱帯の丘にそびえ立つレンガ造りの建物の中に入ると、さりげなく飼育されている**ハブ**が、我々を威嚇してくれた。



動物標本室では、国の天然記念物ヤンバルクイナや人魚伝説のモデルと言われているジュゴンなど、珍しい標本が展示されていたが、やがて全員の視線が釘付けになった。

「これはすごい…感動ものだ！」先生方から、次々に驚きと感嘆の声が上がった。そこにあったものは紛れもなく、あの**イリオモテヤマネコ**なのであった。



今から46年前の**1962年5月25日**、琉球大学農学部教授、高良鉄夫氏のもとに生後まもない2体のアルコール標本(**標本①**)が届けられた。木を伐採したら、樹洞に出産された直後の仔猫が残されていたのだそうだ。さらに1年後の**1963年4月**、イノシシワナにかかったと思われる仔猫のミイラ(**標本②**)が送られてきた。これも仔猫だったので、高良氏は標本を送ってくれた西表島の中学校教諭、親富祖善繁氏に「ぜひ親猫の標本が欲しい」という依頼をする。そして**1965年2月15日**、高良氏のもとに「ヤマネコの毛皮」(**標本③**)と頭骨(**標本④**)が送られてきた。高良氏は、これらの標本から、このヤマネコを新種ではないかと推定したのだ。翌日の地元紙「琉球新報」には**「西表の怪猫」**仮称イリオモテヤマネコとして掲載された。資料館には、イリオモテヤマネコの発見にいたる全ての標本と新聞記事が展示されていたのである。

その後、当時、毎日新聞の記者だった動物文学作家の戸川幸夫氏によって**1965年3月15日**、全国紙で初めて**「西表島でヤマネコ発見。今世紀のベストテンに入るビッグニュース」**と大々的に報道され、日本中の視線が釘付けにされたのである。「新種の発見というおいしい所は全部、本土の人たちに持って行かれちゃったんですよ。」資料館の佐々木先生は、残念そうにつぶやいていた。



ところで、発見当初は新種とされていたが、最近のDNA調査では、イリオモテヤマネコはベンガルヤマネコに近縁な種とされており、必ずしも**新種とはいえない**という状況にある。しかし、西表島にのみ100頭程度しか生息していない絶滅危惧種であることには間違いなく、現在も保護活動が続けられているのである。

〈右から3番目が杉尾先生,4番目が佐々木先生〉